



物事を語る方法は、人の身体の数だけ存在する——
訪れる人の想像する力を借りて、鑑賞することがそれぞれの独自の体験として立ち上がる展覧会
展覧会「語りの複数性」が明日より開幕!

会期：2021年10月9日（土）～12月26日（日） 会場：東京都渋谷公園通りギャラリー



「語りの複数性」会場風景 撮影：木奥恵三

いよいよ明日10月9日（土）より、東京都渋谷公園通りギャラリーにて、展覧会「語りの複数性」が開幕いたします。視覚を使わずに見る人、手話を使って話す人がいるように、人の身体の数だけさまざまな形態で存在する“語り”。本展では、見えない“語り”を自分の経験として受け取り、表現するさまざまな試みを描いた作品を通して、訪れる人の想像する力を借りて、鑑賞することがそれぞれの独自の体験として立ち上がる場をつくります。

本展のみどころ

1. フィクションであり、ドキュメント—さまざまな形態で“語り”を表現する作品たち

8名の作家による写真、絵画、模型、描譜、映像、音といったさまざまな形態の作品は、全体像を把握するための情報が与えないことが特徴です。完全に情報が揃っていないからこそ、想像する余地があり、鑑賞者それぞれの“想像力”によって、同じ作品から複数の、鑑賞者独自の体験が生み出されます。※各作品については、次ページで紹介。

2. 鑑賞者の想像を後押しする展示空間の会場構成を、建築家・中山英之が担当



Photo: Takashi Kato

建物というのは、名前のつけられた、定まった用途を与えられた場所の集まりです。今回の会場構成は、そんなまとまりのなかに、できるかぎりそうではない可能性としての複数の場を、探り当てていくような時間でした。

ひとつに思っていた世界が、もしかしたらそれぞれに異なる受容体としての私たちの数だけ、少しずつ違ったかたちで複数ある。この展覧会のそんな想像力に、重なり合うような空間であつたらと願っています。

—中山英之

※一部抜粋。全文をご要望の方には別途お送りします。

3. 川内倫子の写真絵本『はじまりのひ』を目が見えない人たちが表現する試みを展示

目が見える人と見えない人が集まって、バラバラな「見方」を持ち寄ることで、自分なりの写真を見る経験を立ち上げることを目的に、読書会を行いました。展示会場では、目が見えない4人が読書会のなかでとらえた『はじまりのひ』を、言葉や言葉以外の方法で展示します。

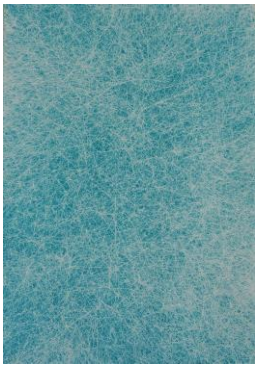
各作家の作品について



大森克己《心眼 柳家権太楼》（2019年）

大森 克己 《心眼 柳家権太楼》

写真家の大森克己は、真っ白な空間の中で、落語家の柳家権太楼が『心眼』を演じる一部始終を撮影した。この試みについて大森は、「落語は写真では撮れないが、物語を運ぶ乗り物として落語家を捉えたら撮ることは可能かもしれないと思った」と語る。音声が消去され、落語家の体のみ焦点が当てられた一連の写真を見ることによって、見る人の想像力に委ねる落語という表現手法の特性が、より一層際立つものとなっている。



岡崎莉望《目》（2014年）

岡崎 莉望 《目》《其処無しの浮き》《響動》

ひとつの線の始まりと終わりを辿ることも難しいほど繊細なドローイングは、岡崎莉望にとっては、見えているものをそのまま描いているという。岡崎の頭の中には描く前から完成図があり、その完成図に向けて、ゆっくりと確実に、線を加えていく。圧倒的な緻密さを共有しながら、作品の特徴はそれぞれに異なっている。複数の人格が共存するという岡崎の創作のユニークさは、作品名のトーンの違いにも現れている。



川内倫子《はじまりのひ》（2018年）

川内 倫子 《無題》（シリーズ「はじまりのひ」より）

写真絵本『はじまりのひ』は、写真家の川内倫子が、出産、そして母になる体験を通して芽生えた気づきを、言葉と写真で綴り、絵本仕立てにしたものである。本展では、写真絵本としてまとめられたものを壁面に展開し、視覚に障害のある人も触って感じられる触図を加え、再構成した。鑑賞者の想像力に委ねるような余白も特徴のひとつであり、言葉は決して写真を説明するのではなく、独立した語りとして写真と並走している。



小島美羽《終の棲家》（2019年）写真：加藤甫

小島 美羽 《ごみ屋敷》《遺品の多い部屋》《終の棲家》

遺品整理や特殊清掃の仕事に就く小島美羽は、孤独死が誰にでも起こりうるということを感じながらも、生々しい現実がなかなか伝えられないことに焦燥感を感じ、ある時ミニチュアで伝える方法を思い立った。それぞれの模型は、現場を忠実に再現したものではなく、小島が目撃してきたさまざまな部屋の特徴が凝縮され、再構成されている。故人はもうそこにはいないが、残されたモノの一つひとつが、かつての住人の暮らしや人生をまざまざと想像させる。



小林紗織映画『うたのはじまり』絵字幕（2019年）
*参考画像

小林 紗織 《私の中の音の眺め》 *新作

小林紗織は、「スコアドローイング」という手法で、音を聴いた時に浮かぶ情景、色彩や形を五線譜の上に記録している。あらゆる音に対してそのような現象が起こる訳ではなく、描かすにはいられない引力が働く音があるという。今回は特に日常の中で心を動かされた音が小林の個人史のように描かれ、一般的に知られた音楽や偶然耳にした音楽だけでなく、心臓の音や虫の声、パチンコ店内の音など、音楽とは捉えられない環境音やノイズのような音も平等に扱われている。



百瀬文《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》（2013年）

百瀬 文 《聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと》

聴者の百瀬文とろう者の木下知威による、「声」を巡る対談の形式をとった映像作品。二人は手話通訳を介さず対話する。木下は、百瀬の口唇の形から言葉の意味を読み取り、自身には聞こえない声を発する。百瀬は、木下の口話を聞き取り、口唇の動きを伴う声を発する。やがてその不確かさに気づいた百瀬は、まるで木下に自らの「声」を明け渡すようなスリリングな試みを仕掛ける。



山崎阿弥《島膜_ibuki》（瀬戸内国際芸術祭 2019）
*参考画像

山崎 阿弥 《長時間露光の鳴る》 *新作

山崎阿弥は、バイノーラル録音（実際に人間の耳で音を聴いている状態を録音する方法）によって、複数の時間と季節、天候のもとで渋谷の街の音を収録した。そして、それらの音がある時、どのように聞こえていたかという「聞こえ」と「響き」をガイドラインに編集し、再生する。窓の外に広がる現実世界と似て非なる風景を、音と鑑賞者の存在によって立ち上げようとする試みである。普段は意識的に聴取しないような音が出ていたり、スピードが変わっていたり、音の再構築が行われている。



山本高之《悪夢の続き》（2020年）

山本 高之 《悪夢の続き》

本作では、二人一組となり、一人がこれまでに見た悪夢について話し、もう一人はその夢がハッピーエンドとなるような続きを考えて話すというルールをもとに対話の様子が撮影されている。夢は、自分が確かに経験したことなのに、夢から覚めた時の自分ですら完全には語るができないものである。さらに他人の夢をあえて言葉という不完全な道具で語り継ぐことによって、むしろ語りえないことを共有する空白の時間を語り手と受け手、そして鑑賞者がともに過ごす状況が生み出されている。



展覧会概要

展覧会名： 語りの複数性

会 期： 2021年10月9日(土)～12月26日(日)

開館時間： 11:00-19:00

*百瀬文の作品は、30分毎の入れ替え制で上映します(毎時0分/30分開始、上映時間25分)。
途中入場はいただけません。

休 館 日： 月曜日

会 場： 東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2及び交流スペース

入 場 料： 無 料

出展作家： 大森克己、岡崎莉望、川内倫子、小島美羽、小林紗織、百瀬 文、山崎阿弥、山本高之

会場構成： 中山英之建築設計事務所

主 催： (公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

※作家プロフィールは、当ギャラリーのWEBサイト(<https://inclusion-art.jp/>)をご覧ください。

関連イベント

■ プレトーク 「複数性を展示すること」(ろう者による手話通訳+バリアフリー日本語字幕付き)
本展企画者と会場構成を担当した中山英之氏が、展覧会のコンセプトや会場構成について話します。

YouTubeチャンネル(<https://youtu.be/FOe8xJ84I7s>)にて公開中!

■ 学芸員によるギャラリートーク

本展企画者が作品解説を行います。10月10日(日)14:00より開催。11月及び12月にも予定。

※その他、アーティストトークやアーティストパフォーマンス、読書会などを予定しています。

詳細は、当ギャラリーWebサイト(<http://inclusion-art.jp>)にて随時お知らせいたします。

アクセシビリティ

鑑賞にあたり音声ガイドやテキスト配布のほか、より多くの方たちに展覧会を味わって頂くためのツールを会場にて貸し出し致します。

お問合せ

東京都渋谷公園通りギャラリー 広報担当

((公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

〒150-0041 東京都渋谷区神南 1-19-8

Tel: 03-5422-3151 E-mail: inclusion@mot-art.jp